

はじめに

今回は、生体における血水をどのようにとらえて臨床に応用したらよいか、基礎的な話をさせて頂きました。

1. 血水を理解することで、1本の鍼による病態変化を四診法（特に切経）で的確に捉える事が出来る。
2. 天の六氣（風・暑・湿・燥・寒・火）は見えないが、生体変化として感じる事ができる。
3. 地水火風は東西医学ともに生存に欠くことのできない概念である。
4. WHOの健康の定義に魂（スピリチュアル）が追加の動きもある。
5. 生活習慣病の大半が血津液の代謝障害である。
6. 難経は、「気」を中心とした医学である。

ここで、二十四難を例にとり、「手の太陰の気絶すれば、即ち皮毛焦る、～皮毛焦れば則ち津液去る。」との記述に対し、私は「津液が潤されないから皮毛が枯れる」のではないかと言いました。しかし、その後の学習により、皮毛が有ることで、そこに津液が集まることが解りました。「肺は皮毛を主る」とは絶対的なものです。

（中国のある乾燥地帯では種を撒き植物を育てることで、そこに露が降り、湿を求めるようです）

先回の講座で特に強調したかったのは、鍼灸治療では血水と言えども「気」の概念を抜きにして語ることは出来ないと言うことです。

本日は、より臨床に密接した形で「気」を含めた血津液の話をします。血の代謝障害についてはすでに名古屋漢方を代表して斉藤がこの場で講義していますので簡単に述べる事にし、今日は津液の代謝障害（水毒→湿砂・痰飲病・水気病）を主に述べてさせて頂きます。

血について

漢方鍼灸会発足以来の学習により、血と言えば、肝陰虚・肝陽虚・肝実等、肝を主にした病態が連想されます。陰虚についてはすでに言い尽くされていますので、今日は、脉が沈の病態（陽虚・陰実）について述べる。

* ここで実際の治療例をあげる。

治療のポイント

悪血は多少なりとも誰にでもある。したがって、腹証で悪血があるからと言っても、すべて悪血証として治療することはない。あくまでも病証、脈証などと勘案して証を決定しなければならない。

たとえば悪血がある人でも一時的に陰虚証になっていることもある。その時は陰虚の状態がその人にとって体調が良いのか、陰実状態が体調が良いのかを鑑別して治療しなくてはならない。

あるいは悪血がある人でも急性病で陽虚になることもあれば陽実になることもあるのだから、治療は悪血を見つけるのではなく、その人のその時の状態が悪血証として治療すべきものかどうかを判断する。

悪血証と陽虚証を間違えて治療すると、陽気を補う浅い治療しかしないから、外の寒は取れても内の停滞はとれない、だから根本的な病証は取れない。

1 悪血の所見と治療

血行障害、熱（乾燥）障害、精神・神経障害が主な病症である。

（1）血行障害

舌下・下肢・腹壁などの静脈の攣縮・蛇行・拡張・閉塞。口唇及び四肢末端のチアノー

ぜ。皮膚・粘膜の紫斑点及び皮膚乾燥（暗黒色）。手掌及び爪の暗赤色。蜘蛛状血管腫。齒槽膿漏。手掌紅斑。痔疾。皮下出血。目の下のクマ、シミやシワ、発疹、吹き出物が出やすい。

（２）熱（乾燥）障害

口渇はあるが水を欲しない。全身的または局所的煩熱感。

（３）精神・神経障害

不眠、不安、不定愁訴、過敏症・躁状態・健忘症・自律神経失調症・鬱病・てんかん。

（４）その他

固定性の刺痛、絞扼痛、拒按を呈する。女性は月経不順、月経困難、不妊、性ホルモン機能障害を訴える。男性は排尿困難。

肩こり・頭痛・のぼせ・眩暈・耳鳴り・動悸・息切れ・便秘。

本治法→ 肺虚肝実、脾虚肝実で治療するがその選穴においては本会でいままでに学習した選穴論を応用する。

標治法→ 栄気に対する刺鍼、刺絡、灸頭鍼等。

細絡（蜘蛛状血管腫）→刺絡して、手しぼり又は吸角。

肩こり・頭痛・腰痛など固定性の刺痛、絞扼痛・拒按→最初は浅鍼、表面の抵抗が緩んでから刺絡する。最初から刺絡しても悪血は出ない、かえって痛みが増加する。

生理不順・生理痛、前立腺炎など→小腹の悪血性抵抗に灸頭鍼。

顔面神経麻痺、難聴、耳鳴りなど→経絡上に細絡があれば著効。

歯痛、扁桃腺炎、神経の痛痺など→井穴刺絡。

痔疾→仙骨部八・穴の悪血所見に吸角。

血分（悪血に水がかからんだもの）→臍下任脉上の利水穴に灸頭鍼、及び足三焦経の治療が必要（後述）。

灸頭鍼は衛気栄気を補い血・津液に作用して、水を移し悪血を除くものであると思う。最初はポカポカと温かく衛気に作用し、次にその暖かさにジーンとした軽い響き（動き）が加わる。この感覚を得るには灸を出来る限り堅く造るのがコツである。

症例 1 32歳、女性

主訴. 生理不順、アトピー性皮膚炎、肩こり、便秘。

所見. 口乾、皮膚乾燥、舌下静脈の怒超

脉証. 脾虚肝実

2回目. 肩背部の悪血所見（皮膚に軽く触診するとブヨブヨとして渋る、いわゆる血分である）

刺絡して吸角をかけると最初はやや薄い血でしたが、すぐに真っ黒い悪血が出る。

3回目. 先回の治療でアトピー性皮膚炎がかなり改善する。関元に灸頭鍼（サービス）を行ったが失敗する。本証である脾の脉が騒脉を呈し指をつく。悪血所見の無い場所への治療は火邪となり不可である。

4回目. 果たせるかな、やはり、前回の治療後アトピー性皮膚炎が悪化。肺虚で治療後即座に改善、患者もビックリする。

症例 2. 45歳、男性

主訴. 腰痛、左坐骨神経痛（これで4回目、治癒ごの健康管理を進めるが聞き入れない、発病すると毎日治療に訪れる、何回しても懲りない駄目患者）

所見. 手足の冷汗、左腰部の悪血性抵抗と拒按、左委陽、右費用・委陽に圧痛・硬結顕著。

脉証. 肺虚肝実

治療. 復溜（補鍼）、行間（経に逆らいやや加圧して補鍼）、足三焦経に対しては留置鍼、標治法の後抜鍼後員鍼で撫でる。

2回目. 腰痛は、悪血所見に吸角することで、ほぼ改善したが、下腿の痛痺が取れない10かいめ。至陰に刺絡すると即座に治癒する。当然のことながら今までの治療が有効に働いての好結果である。

2 津液（水）の所見と治療

先にも述べたように、難経は水（津液）の病気は言わない。言わないわけではないが水を直接処理する手技は無い。これは、衛気を補うことで水を津液に気化する事が出来る。榮気を補うことで血流を促進して水を寫す事が出来るからです。だから、やはり、「氣」が治療の主役です。

津液の病理産物は湿病、水気病、痰飲、血分の四つに大別されます。

（1）湿病

脾虚による筋肉や関節の水滯が主な病症。

胃は水穀の精微から常に陽気を生産している、陽気は活動的であり、肺気の宣発作用により体表から発散している。

脾虚により、胃の陽気が陽明形で止まり太陽経で発散出来ないため水滯となる。そこに外邪（湿・寒・風）が加わると寒熱病症を起こす。

外界に湿気が多くても脾虚が無ければ発病しない（内証無ければ外邪入らず）。

靈枢に「せい湿虚を襲う時は下より起こるなり」又、「湿は関節に流れる」とある。これは、榮気が虚して循環しないと関節に水が停滞する事を示している。

陽明経実熱証→脾虚で胃の寒熱状態で、陽明経を中心とした部分（太陽系も一部入る）や筋肉、関節に水が停滞した状態。

実腫（発赤・発熱）を現す。胃腸症状は無い。

脉状→沈（多湿）・細（気血の循環障害）・数実（熱）。陽明経の熱が多ければ浮・数・実。

治療→脾を補い、胃経・小腸経の実熱を取る。選穴は火穴が有効。灸を不用意に施すと血熱となり痛みが悪化する。

脾虚胃の虚熱証→胃腸症状（痰飲）及び筋肉・関節の浮腫。

脾虚陰虚の虚熱→腎の津液を渴かす→表（膀胱）の熱となる→小便不利→胃腸の水滯→痰飲病。

虚熱→表に向かう→発散出来ない→筋肉・関節の浮腫となる。

脉状→沈（湿）・弦（発散できない熱）・浮・大（虚勞）。

治療→選穴は土穴が有効。虚熱の程度により陽経（胃・膀胱）の瀉。

症例. 登山で疲労し、四肢の倦怠感、特に関節が抜ける感じでがくがくする。

この患者は、周一回来院している、やや小太りで腰痛・頭痛・肩こり・便秘で脾虚陰虚で治療する事が多い。

労倦により脾の津液を渴かしその為に内熱となり、筋肉が緩み四肢倦怠感や関節の緩みを起こした者です。

脾虚陽虚証→関節症状、食欲不振、冷え症、リュウマチ等。

病証→胃の陽虚と水の停滞があるので、小便難・手足の冷え、腹痛下痢、吐き気、悪寒がある。

脉状→沈・細・弱・虚・弦・遅のいずれかの組み合わせ

治療→土穴が有効。陽経（胃・膀胱・小腸経）も補う。

（2）水気病→腎虚・肺虚より、皮内に水滯が起こるもの。

水気病は「氣」を補うことで解決出来るので、肺虚、腎虚、脾虚など六十九難型で治療します。

肺虚の場合は尺沢を補い水を動かします。腎虚の場合は陰谷で外にある水を腎に戻します。女性で閉経後に肥満になったのは津液が血に変わらない為です。

脾虚の場合は、脾は筋肉を主るために脾虚になると腎侮りて筋肉の間に水が停滞し水気

病となります。

坐骨神経の痛痺は足三焦経の治療と井穴刺絡が有効。

足腰の冷えの時に土穴・金穴を補い、膀胱経で陽気を補っても症状が改善しない時は、腎経の陰谷を補うと症状の改善を見ることがあります（水には水をもってする→陰極まれば陽となるの原理）。

証は、腎虚陰虚証

病理→腎には精水である津液と心から送られる陽気（命門の火）と腎を引き締める腎気が備わって始めて正常の働きを行う。腎の津液が、虚劳や房事過度などにより不足すると、虚熱が発生する。その虚熱は上記で述べたのと同様、表から発散されるがいずれはその熱はおさまり、表には水が多くなる。また、津液の中には腎気が含まれているし、その津液が不足すれば、陽気（命門の火）も不足してくる。そうになると、水の調節がうまくいかず、水の多い肥満になる。これを水気病という。これには、肺気の虚も絡んでいる。

病証→水の多い肥満体の病証は、腎の虚熱が胃に影響するので食欲は変わらないか、旺盛。肺気が虚しているので汗がよく出るか、或いは出ない。表に水滞があるので、暑がりや寒がり。夜間排尿・腰痛・脚弱・関節の浮腫。

脉状・浮大または沈虚。水が多いと弦のこともある。

治療・肺経の尺沢の補法、腎経の復溜の補法、陰谷の補法、胃経の足三里の補法。

（3）痰飲→脾の精気虚で胃腸に水滞が起こる（痰飲）

病症は、嘔吐・下痢・食欲不振・小便不利、眩暈・動悸、四肢厥冷。

下痢と小便は反比例する。

三焦咳等もこの痰飲が原因しているものと考えられます。

胃寒は胃内停水、吐き気、眩暈、下痢等。

胃熱は頭痛、核痰、腎・膀胱の熱になる。

眩暈、耳鳴りは三焦経、胆経上の細絡に刺絡。

痰の字はやまいだれに炎と書きます、つまり、水に熱がからんだものですから湿熱を取り除く治療が必要。栄火穴が有効。

靈枢では栄火穴の栄の中の字を木と書かずに水をあてて「ケイ」と読んでいます、小さな水たまりを意味する字のようですが、水のからむ病症で合水穴でうまくいかない時に、水をさばく治療穴として栄火穴を使うと良い結果を得る事があります。

証は、脾虚陰虚、脾虚陽虚、脾虚腎虚

病理→もともと胃の弱い者が、熱病の誤治や飲食の不摂生などが原因で、この証になる。

胃の陽気の少ない者は、腎の陽気も少なく、痰飲ができやすい。

病証→胃に水滞があり陽気の運行を妨げるため腎虚の動悸・息切れを起こす。水滞が心下にたまり食欲不振・吐き気を起こす。表の陽気が少ないため目眩が起き、さらにひどくなると手足の厥冷・手足の引きつれが現われる。また浮腫も起きる。小便が勢いよくでない。

下痢。

脉状→沈（陽気衰・多水）。細・しょく（渋）・数・緊・遅・弱（陽気衰）になる。

治療・脾経の太白・陰陵泉の補法、心包経の太陵・内関の補法、腎経の太谿・大鐘）の補法、膀胱経の飛陽・附陽の補法。

動悸が強ければ腎経の復溜・心包経の曲沢（血脈を引き締め余分な水をさばく）の補法。

目眩には丘墟・陽輔の補法。

（4）血分

悪血に水滞がからんだ証であり、七十五難型で治療します。中年以後の女性に多く肥満して腹証に特長がある。

膈下任脉状の諸穴（氣海穴を除く）は利水作用があるので灸頭鍼が有効。

水気病、血分等の水は合水穴を使い、腎に津液を戻します。腎そのものの津液を補うと言うよりは腎以外の水を腎に採り入れる作用があるものと思われま。

症例3. 40歳、女性

主訴. 全身及び四肢倦怠

所見. 瘦人ですが水滯有り、特に下腿が顕著、右臍傍から下腹にかけての水滯。

脉証. 脾虚陽虚

治療. 両・陽に留置鍼、

2回目. 関元に灸頭鍼

3回目. 先回の治療後下腿の倦怠感改善する

症例4. 65歳女性

主訴. 多発性関節リュウマチ

所見と愁訴. 全身倦怠感、食欲不振、右手関節屈曲不能、特に甘い香りが気になる。

脉証. 脾虚陽虚

治療. 火穴が主

10回目. 甘い香りが抜けると共に病症改善、「すごく調子が良い」と患者の顔つきや声も明るくなる。

症例5. 31歳、男性

主訴と愁訴. 右突発性難聴と閉塞感（3カ月前に発症その後毎日点滴に通院するが効果無し）、全身倦怠、朝の発熱

所見. 瘦形、神経質、顴骨付近の細絡

脉証. 腎虚

治療. 然谷の補鍼、魚際の補鍼

細絡に対して刺絡

現在も通院中ですが、症状軽減している。

足三焦経の運用

めまい・耳鳴り、神経の痛痺など、水の絡む病症はすべて足三焦経（委陽、飛陽、・陽）に緊張、抵抗、圧痛、硬結の反応が現れます。

私の臨床経験では、三焦経の反応と証との関係は次の通りです。

肺虚. 左委陽（軽按で緊張抵抗、按压すると硬結抵抗共に無いが圧痛有り）。

脾虚. 左飛陽（軽按重按共に軽い緊張と抵抗）。

腎虚. 右委陽（軽按で浮腫性緊張、重按で圧痛と硬結）。

肝虚. 右飛陽（重按で圧痛硬結共に顕著）。

肝実. 左右の飛陽、委陽（軽按重按共に左側は軽い反応、右側は圧痛抵抗硬結共に顕著）。

陽虚. 左右の・陽（軽按で浮腫性の抵抗、按压すると軽い圧痛）。

以上臨床追試され、御意見を頂ければ幸いです。

《参考・引用文献》

『臨床に生かす 古典の学び方』 池田政一著 医道の日本社

『臟腑経絡からみた薬方と鍼灸』 池田政一編著・監修 漢方陰陽会

『古今腹証診覧』 小川新・池田太喜男・池田政一 共著